安楽寺寺報
聞光
第５２号
時誕会号
2009/8/1
発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

終戦の日に思うこと

信楽峻麿

今年も酷暑の中、八月一五日の終戦記念日が近づいてきました。今日では日本の人々で、日本が戦争に敗れた日のことを思いだす人は、ほとんどいないことでしょう。まして今日の若者の中には、かつての日本が、中国・アメリカ・イギリスなどと、戦争をしたことすらも、知らない人がいるのではありませんか。

あらためて歴史の流れの早さを思わずにはおれませんが、私にとっては忘れがたいこの日であります。

私は一九四五年七月、大学一年生の時、一八歳で徴兵されて北海道の旭川の部隊に入りました。まもなくしてアメリカの艦載機が、しばしば兵舎を襲撃するようになり、機銃掃射の弾丸のもと、必死に応戦いたしました。いま思うと、よくも死なずに生きながらえたものだと思うことです。この戦争によって、私の友人は多く死んでいきました。戦争の悲惨さを思わずにはおれません。

この戦争をめぐって、いつまでも私の心にわだかまり、決して忘れえない思いがあります。それはすべて戦後になってはじめて知ったことですが、当時すでに、日本の敗戦が決定的であった一九四五年七月二六日に、アメリカ、イギリス、中国、ソビエトの四国が、ドイツのポツダムにおいて会議を開き、日本に対して戦争降伏の条件を提示しました。その内容は、日本の軍隊の解体、本州、北海道、九州、四国のみを日本の領土とし、民主主義の政治を完成させるということでした。

当時の日本政府は、もはやこれ以上は戦争はできないと判断し、それを受け入れようとしましたが、天皇制の護持を主張するものがいて、そのことをめぐっていろいろと交渉をつづけたことから、戦争の終結が延期となり、八月六日には広島に原子爆弾が投下され、またその九日には長崎にも投下されて、計三〇万人の生命が失われました。そしてまた八月八日にはソビエトが参戦を通告して、満州に進撃を開始し、在留日本人が一八万人も死亡したといいます。

もしももっと早く、戦争の終決を表明しておれば、広島、長崎の原爆投下もなく、ソビエトの参戦もなかったわけで、多くの日本人の生命が犠牲にならずにすんだわけです。結局は、天皇制を擁護するために、これほどまでの、多くの人々の生命を犠牲にしたのです。

このたびのアジア・太平洋戦争は、天皇がはじめた戦争です。しかし戦争に敗れても、その責任を負うこともなく、その天皇制を守るために、日本国民の生命が、これほどまでに多く犠牲になったのです。私は改めて日本の政治というものが、私たち国民の幸福のために存在するものではなく、わずか一握りの特定の人々のためのものでしかなく、私たち国民は、そのためには、いつでも見捨てられるものである、ということを思わずにはおれません。

そういう現実についてはよくよく自覚し、これからの日本の政治が、ほんとうに国民のためのものになるかどうか、よほど厳しく、監視の眼をもちつづけねばならないと思うことです。

（〇九・七・七）

安楽寺顕真廟完成

安楽寺納骨所の『顕真廟』が完成いたしました。この納骨システムは安楽寺独自の納骨方法で、十三回忌までは安楽寺地下納骨堂へ納骨し、十三回忌以降は安楽寺合同墓へ合祀いたします。

十三回忌までは安楽寺にお参りいただき、しっかりと先祖、故人の願いを聞き届け、合同墓へ合祀するときには、合同墓左に刻まれている、「かならずかならず一つところにてまゐりあうべく候」の親鸞聖人御消息のお心をいただいた上で、安楽寺寺族、門信徒が一つところに合葬され、いよいよ倶会一処の世界を味わえる場所となることを願い開設いたしました。

８月１５日午前１０時から入仏法要をお勤めさせていただき、顕真廟にかける願いをお伝えさせていただければと思います。どなたでもお参り下さい。

安楽寺法要案内

九月	彼岸会法要	日時　９月　７日（月）昼席から ９月　８日（火）昼席まで 講師　三原　明円寺 内藤良範先生
十月	永代経法要	日時　１０月８日（木）昼席から １０月９日（金）昼席まで 講師　佐伯　正覚寺 瀧渕良孝先生
十一月	報恩講法要	日時１１月２１日（土）昼席から １１月２２日（日）昼席まで 講師　安楽寺 信楽峻麿前住職

安楽寺マンガ通信

信楽めぐみ作

聞思

私のいのちは脳？

信楽晃仁

先般、衆議院に引き続き参議院でも臓器移植法（A案）が可決され、「脳死は人の死」とする法律が成立しました。衆議院では可決されたものの、参議院ではA案の対案や修正案も出ており、簡単には可決されないだろうという、最初の思惑は大きくはずれ、十三日あっさりと可決されてしまいました。というのも、ちょうどタイミング悪く、衆議院の解散が持ち上がりそれに議員さんは気を取られ十分な審議ができなかったようです。テレビも当日は衆院解散のことばかりで、私が見る限りでは臓器移植法の採決についての報道はありませんでした。次の朝一番にテレビで、A案可決という結果を知りがっくりしました。多くの議員さんはいのちのことよりも、自分のことで頭がいっぱいで、この政治生命の危機、いわば保身のため一法案どころではなかったようです。しかし冷静に考えてみれば、普段から「女性は子供を産む機械」だとか「死刑をベルトコンベアーのように次々に」とか「自殺にはＤＮＡが関係している」などというような全く命を見つめていない発言（失言）を繰り返す議員さん達に、まっとうな判断を期待する方が甘かったと、諦めたことです。

さて、愚痴はここら辺にしまして、この臓器移植法改正は、脳死を人の死と法律で定めた訳です。そのことによって色々とこれから問題が起こってきますが、基本は私のいのちは脳ということです。心臓が動いていようが、呼吸していようが、暖かい体をしていようが、からだが動いていようが、それは部品のことで、脳が死んだら一人の人間を死んだことにして、その間に使える臓器を取り出して使ってしまおうと、臓器移植を推進するために脳死を死にしたわけです。今までなら心臓が動いている人間から臓器を取り出せば殺人です。しかし心臓が動いていても死体だと決めれば、殺人罪にはなりません。

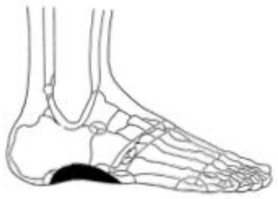
これは図のように、私たちのいのちをどこまでにしようかと言うことです。法律でここを死にしようと決めたので、今までは生きているとされたところも死体として扱われるわけです。今までは心臓死を死としていました。それを前倒ししたのが脳死です。そして一時問題になりました、ライフスペースという宗教団体がミイラになっている人間を「これは死んでいるのではない、治療中の人間だ」といい通したおかしな事件がありました。しかしこれはらは死の点を前にもってくるか、後にもってくるかの違いで、脳死もミイラも、私たちが今までの文化の中で、これが死だと、みんなが共通して納得できる点を、自分達、一部の人間の都合で前後に動かしたものです。つまりいのちがそれぞれの都合で、長くしたり短くしたり、どこまでがいのちか、どこが死かわからなくなったということです。

現在は死後、二十四時間は火葬できません。なぜかと言えば死んだと思っていても、生き返るかも知れない、死んでいないかも知れないと、念には念を入れて、二十四時間待ちました。これもこれからは必要なくなります。心臓死といえばもちろん脳死後ですからすぐ焼いても大丈夫ということです。これから多くの間違いを起こすことになるでしょう。

新聞に今回の衆院でも参院でもしっかりとした論議をされない まま可決されたと出ていました。それは死が軽くなってきているのです。死を軽んずるというのは、生を軽んずることであり、いのちを軽んずることです。死を意識しないとき、命は見えていません。命が見えたと言うことは、死が見えたと言うことです。命に限りがある（死）と気づく時、我が命に気づけるのです。

先年、佐世保の小学校の授業で死についての話し合いをしました。そこで先生が「みんなは死んだらどうなる？」と問うと、三十三人のクラスで二十八人が「生き返る」といいました。死がわか

足もみ健康法　足医術入門
第5回　膝痛の治し方



今回は膝痛の治し方です。右の膝が痛ければ、右足。左の膝が痛ければ、左足を揉んで下さい。神経反射療法（棒を痛いところに押し込んで、30秒以上押し続ける）にて我慢できる限界までお して下さい。数回繰り返すと膝の痛みは解決します。

さらに毎日毎日その足診区を揉み、柔らかくして痛みがなくなれば完治します。

御正忌参拝（団参）

京都本願寺へのお参り
御正忌報恩講
日時　1月13日・14日
旅費　27000円（基本）
オプション　お斎15000円、帰敬式10000円
詳細はお尋ね下さい。

仏事のイロハ

お盆のお飾り

「お盆にはどういうお飾りをすればいいのですか。」と尋ねられることがあります。先般も連研で「お墓には盆灯籠をたてるべきか、塔婆という板に南无阿弥陀仏の名号を書いたものを供えるべきか」という質問がありました。盆灯籠も塔婆もあとでゴミになり粗末になりますので、そのような物ではなく、あなたのお心を持っていっていただければ充分だと思います。どうしてもと言われる場合は、盆灯籠を持っていき、帰りに持ってお帰りください。（塔婆は浄土真宗の教えにはありません）

さて、お盆のお飾りで気をつけなければならないことは、精霊棚を作ってお膳や、盛りだくさんの果物、またなすやキュウリ、それもそのなすやキュウリに爪楊枝をたてて、足のようにしたものをお供えするところがあります。これは、前号でも書きましたが、先祖が帰ってくるという迷信から、このなすやキュウリを馬と牛に見立てて、先祖が乗る乗り物として用意するのだそうです。

浄土真宗ではこれらは全く必要のないことです。お盆のお飾りは普段と同じく、前卓に打敷をしき（できれば夏用の打敷）菓子、果物をお供えして、三具足（お花、お香、ローソク）を整えてください。

そもそもお盆とは、仏弟子の目連尊者が、餓鬼道に落ちた母を救おうとして、その母に食物を与えるのですが救うことができず、お釈迦さまの導きで救われたという故事に由来します。他宗では施餓鬼会といい、餓鬼に施すことを主眼にしますが、私たちは、お釈迦さまの導きで、救われ難き母が救われたことを我が身に引き寄せ、救われ難き私もこの教えによって救われることを喜ぶものです。お盆法座のことを歓喜会とも言うのはそういった意味からです。